

三好徹

幸運な
志士

若き日の元勳たち



幸運な
志士

三好
徹

幸運な志士

若き日の元勳たち

1992年4月30日 第一刷

著者 三好 徹

発行者 荒井 修

発行所 株式会社徳間書店

〒105 東京都港区新橋四一〇

電話 東京 3433-6231 (代表)

振替 東京 4-44392

印刷所 図書印刷株式会社

カバー印刷 近代美術株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

落丁・乱丁本は、本社またはお買い求めの書店にてお取り替えます。

定価は帯・カバーに表示してあります。

© Toru Miyoshi 1992 Printed in Japan

〈編集担当 松岡光雄〉

幸運な志士

——若き日の元勳たち

目次

幸運な志士――伊藤 博文	5
孤独な宰相――黒田 清隆	59
最後の元勳――山県 有朋	109
葉隠 嫌 い――大隈 重信	155
最後の元老――西園寺公望	201
不貞の妻――原 敬	239

装画／生頼範義
装丁／秋山法子

幸運な志士

——伊藤博文

1

親のつけてくれた名前だったが、彼は自分の名前が気に入らなかった。「利助^{りすけ}」というのである。どうせ思いつきでつけたのだろうと思っていたが、父親の十蔵は、利助にとっては曾祖父にあたる利八郎と祖父にあたる助左衛門から、それぞれ一字をとって命名したのだという。

利八郎も助左衛門も、それほど悪い名前ではない。しかし、利助とはいかにも軽がるしい印象である。

もつとも、軽い感じの方がいい、と父親は考えたのかもしれない。父親は、長州藩^{ちゅうげん}の間である伊藤直右衛門の傭人なのである。中間^{ちゅうかん}というのは、士族ではない。その下の卒族に含まれている。その卒族の家の奉公人なのだから、偉そうな名前はかえって困る。

「利助」

と呼びやすい名前がいいと考えたのであろう。

じじつ、呼びやすい。だから、彼が自分では一人前になったと思っっているのに、いまもって、そう呼ぶ者もいる。そのたびに、

「いや、利助ではありません。俊輔^{しゅんすけ}です」

と彼は訂正する。

この俊輔にするのも、彼なりに苦心はしたのだ。まず、利助から利介にかえた。読みは同じで

ある。だから、周囲のものも気にしない。

それから彼は、この読みを「としすけ」にした。字は同じだが、としすけの方が何となく重みがある。曆に則していうと、安政二年に、長州藩が三浦半島の警備にあたっていたとき、作事吟味役の来原良蔵の下で下働きの手付をしたときは利助だったが、二年後に山口に帰ったときは利輔になっていた。

もつとも、この奉公はつらかった。夜が明けると同時に勤番小屋に行くのだが、履物をはくのを禁じられ、つねに裸足だった。冬など、つい寒いというと、来原は、

「寒いといったからといって寒さがゆるむのか。弱音を吐くな」

と叱りつけた。彼としては、

「へい、申訳ございません」

と謝るしかなかった。

来原は権柄けんべいずくのところがあつて、彼としてはどうも好きになれなかったが、そんな贅沢ぜいさくのいえる身分ではなかった。

それに、来原に会えたのは、彼の人生における最初の幸運だった。山口へ帰ることが決つて挨拶に行つたとき、

「利助、お前、学問がしたいのなら添書そくしつうを書いてやろう。なければ束脩そくしつうはいらんとという男だから、お前にはちようどよかろう」

と来原からいわれた。

そこで紹介されたのが吉田寅次郎（松陰）だった。添書には「利助」となっていたらしい。翌年七月に、卒族の山県小助（有朋）といっしょに三カ月間京都へ出たとき、松陰は在京の愛弟子久坂玄瑞あてに、

「利助もまた進む。なかなか周旋家になりそうなり」と書いている。

彼は松陰から出される宿題の答えを書くときは、「利輔」と署名した。

京から戻って間もなく、防備調査役となつて長崎へ出張する米原の供をするとき、松陰は、「機会があれば、この添書を持参して、熊本の大隈武兵衛殿をたずねるがよい」といつて一書を彼に渡した。

彼は長崎にいる間、もし暇があれば熊本へ行こうと考えていた。大隈は各藩の間でも知られた人物である。しかし、長崎での用務は多忙で、そんな暇はなかった。約八カ月後の安政六年六月に米原に従つて萩へ帰ることになった。

せっかくの添書が無駄になったので、彼はがっかりしたが、師匠がどんなふうに分を紹介してくれたのか、彼は知りたかった。

（ま、いいだろう）

彼は開封することにした。そういう図太いところがあった。

師の松陰と野山獄で同房だった男で、富永弥兵衛という偏屈者がいる。これが出獄してきて、松陰塾の師範代のようなことをしている。ときどき、彼に髪をとかさせるのだが、あるとき、白しろ

髪を一本ことわりもなく引き抜いた。

弥兵衛はいきなり彼を張りどばした。

さすがに、むツとしたが、彼は顔には出さず、前と同じように髪をとかした。

「利助、お前はぬらぬらした奴じやのオ」

と弥兵衛はいった。

「はア、そうですか」

彼は逆らわなかった。

「図太いやっちゃ」

と弥兵衛は呆れたようにいった。

たしかに、そういう図太さはある、と彼は自分でも思っていた。そうでなければ、生きぬくことはできない、と自分にいい聞かせていたのだ。

で、彼は師の轟あての添書を見た。漢文でこう書いてあった。

「此ノ生、伊藤利輔ト称スル者、胥徒ノ末役ナルモ、反ツテ吾徒ニ従イテ遊ブヲ好ム。才劣リ学穉シ、質ハ直ナルモ華ナシ、僕頗ルコレヲ愛ス、向ニ事ニ因リテ上京シ、数月ニシテ帰ル、此ノ行ハ良藏ニ従イ、崎ヘ往ク、道ヲ枉ゲテ貴藩ニ出ヅ、幸ニシテ一晤ヲ辱ウセントス、兼テ教ワル所アランカ」

この書生は伊藤利輔と称する者で、小役人の下っ端ですが、それでいて（罪人である）わたしの仲間に入っていっしょにいるのを喜んでいます。才能は（他のものより）劣り、学問も幼稚で

す。性質はいいのですが、華やかさはありません。わたしはそこを好んでおります。以前、事情があつて上京しました。数カ月で帰りました。このたびの旅行は（来原）良蔵の供で長崎へ行くのですが、貴藩に立ち寄るとのこと、どうかちよつと会つて下されば幸いです。かねてから教えたところがあるはずですので――

彼はがっかりした。

「才劣り学穉シカ」

自分の弟子を紹介するなら、もう少しほめてくれてもよきそうなものではないか。

たしかに、久坂や高杉晋作に比べたら、そうかもしれない。だが、自分にはかれらのような勉強の時間はなかったのだ。貧しい家計を少しでも助けるために奉公しなければならなかった。

そう思うと、彼はしだいに腹が立ってくるのを抑えることができなかった。

（もう先生とは思わんぞ）

と彼は胸の中で叫んだ。

高杉は上士の若様で、祖父や父親がうるさいらしく、家人が寝てからこっそり抜け出してくるという。松陰は寝ずに待っていて、教えてやるらしいが、リスクにとつては羨しい話だったのだ。しかし、帰藩してみると、思いがけない事件が起きていた。一カ月前、松陰は幕府の詮議をうけるため、罪人として江戸へ送られたという。

九月になって、彼は来原に呼ばれ、

「兄上が江戸へ行くことになって気のきいた小者を探しておられる。お前、行くつもりがあるなら話してやろう」

といわれた。来原の妻は桂小五郎の妹である。桂は秀才の誉れ高く、いずれは長州を背負って立つ人物と目されていた。

「よろしくお願いします」

と彼は頭を下げた。

江戸に着いたのは十月十一日だった。

麻布の藩邸に旅装をとくと、高杉が蒼い顔をして桂をたずねてきた。

「リスケ、お前もいっしょか」

と高杉は意外そうにいった。

「はい、お供させていただきました」

と彼はおとなしく答えた。

高杉は、帰国せよという藩命をうけ、十七日に出発することになっていた。獄中の松陰に差入れをするなどの面倒をみるので、幕府を恐れた藩が帰国させることにした。高杉も藩命には逆ら

えず、後事を桂に託してきたのだった。

高杉が去って十日後の十月二十七日、松陰は伝馬町の牢で処刑された。

二日後の二十九日の七ツ時（午後四時）に遺体が下付されることになった。獄吏に賄賂をつかませたのである。

「いっしょにこい」

桂にいわれ、尾寺新之丞、飯田正伯といっしょに、彼は回向院へ行った。

境内の隅にある小屋に粗末な棺があり、その中に、首と胴が衣服を剥かれて入っていた。彼は汲んできた桶の水で、血まみれの松陰を洗い清めた。桂が襦袢をぬぎ、飯田が下着をぬぎ、彼は帯をとり、それらを松陰に着せたのち、持参の大カメに納め、橋本左内の墓の隣りに葬った。

桂が、

「二十一回猛士之墓」

と墓標に書いた。生前の松陰は、生涯に二十一回猛烈な行為をするといひ、この号を用いていた。この作業を手伝いながら、

（世の中というのは奇妙なものだ）

と彼は感じていた。

松陰がもつともかわいがった久坂や高杉ではなく、弟子でもない桂やさして縁の深くない胥徒の末役が、こうした役をはたすめぐりあわせになった不可思議さである。

しかし、このことが彼の運命に大きく影響した。松陰の遺体の始末を手伝ったということ、

彼は門弟のなかで一目置かれるようになった。

桂は、有備館御用係となり、桜田の藩邸に移った。有備館は、江戸にいる藩士のための文武修行の場である。

間もなく桂は都講（館長）になり、彼は、桂の理解で受講できるようになった。

このとき、利輔と呼び方を改め、すぐに「とし」に「俊」の字をあてることにした。

伊藤利助

伊藤俊輔

と並べてみると、やはり俊輔の方が何かしら重おもしろく感じられる。

桂の用で、伊藤は各藩の有志のところへ使いに行ったり、打合せの場所へ案内したりした。当然、金がかかるが、桂は藩からたっぷり運動資金をもらっており、そのおこぼれで彼も小遣錢には不自由しなかった。品川遊廓で遊ぶことを覚えたのもこのころだった。

このころ、彼は、仲間うちの手紙には「桂君」と書いている。桂を同列視する気概とみることのできないではないが、当の桂あてには、

「御支頭様」

と書く。このあたり、いかにもこの若者らしい処世の巧みさである。

文久二年五月、俊輔は桂に従って上洛した。このころ、京における藩内の急進派の中心人物は久坂であり、かれらが目の仇にしたのは公武合体を説く長井雅楽であった。長井は航海遠略の議を建白し、ひところは大した勢いだった。